

《 論文 》

高校教科福祉におけるアセスメント能力の育成を目指した対話的事例 シナリオを用いた授業の効果と検証

Effectiveness and Verification of Lessons Using Interactive Case Scenarios Aiming to Develop
Assessment Ability Subject of Welfare in High School

角谷 道生
三重県立明野高等学校

Michio KAKUTANI
Mie Prefectural Akeno High School

Abstract

In this research it is assumed that the practical ability of the learner consists of techniques and perspectives. Using a lesson with an interactive case scenario, we examined how a change in/of the levels of awareness, perspectives and perspective relativity affect the assessment ability of the learner in the care process, which is one of the key practical skills of care workers.

As a result, lessons using interactive case scenarios encourage students to recognize, relativize, and transform their views. This allowed students to recognize their challenges, approach them professionally and deliberately, and work from different angles to achieve their best. Interactive case scenarios also allow you to acquire skills. Specifically, information gathering, problem analysis, decision making, and verbalization. Students acquired these abilities by thinking about case scenarios themselves, giving their opinions to others, and listening to others. From the above, it was found that the lessons using the interactive case scenario acquire the idea of things such as the view of long-term care of the assessment ability and the technique such as the information gathering ability.

Key words

Assessment ability, Care process, Interactive case scenario

問題の提起

筆者は高等学校で教科福祉を担当している。教科福祉は、中央教育審議会答申（2016）において、職業人としての必要な資質・能力を育む観点¹から、実践や体験を通じた実践力の育成が求められている。そこで筆者は、教師の実践力（授業スタイル）を観（価値観・信念・哲学）と技術（知識・技術）の相互作用により形成されたとした森脇健夫（2011）の構造を、学習者の実践力として援用し、学習者の実践力を観と技術から構成されていると捉え、角谷道生（2020）において、観の自覚化・相対化・変容を目的とする対話的事例シナリオ²を用いた授業を、高等学校の教科福祉で行い、生徒にどのような効果があるのか検証した。その結果、生徒は、自己内対話・事例との対話・生徒同士の対話・教師との対話を通し、アクチュアリティな

学びの中で、様々な可能性や関係性を考慮しながら、問題の所在を捉え直していることがわかった。この行為は、介護福祉士の専門的な実践の1つである「介護過程」における、情報収集・分析・課題の明確化等を行うアセスメント能力と非常に近いものがある。しかし、対話的事例シナリオを用いた授業がアセスメント能力の育成にどのような影響を与えているかは、十分に明らかにされていない。

先行研究の検討

本研究では介護過程におけるアセスメント能力の育成に、対話的事例シナリオがどのような影響を与えるのかを検討していくが、介護過程やアセスメントの内容やその範囲、そしてアセスメント能力について、現在のところ十分に統一されたものがない。そこでここでは、本研究で扱う介護過程とアセスメントの範囲や内容、アセスメント能力について先行研究を概観しながら明らかにするとともに、アセスメント能力を育成する先行研究の到達点と課題について述べていく。

「介護過程」は、介護保険の導入や社会福祉を取り巻く環境の変化に対応し、国民の福祉需要の増大・多様化に適切に対応するため、2000年に介護福祉士養成カリキュラムが見直された際に、介護福祉士の資質を向上させ、専門性を高めるために生活上の課題を解決するものとして、当時の既存の介護福祉士養成科目であった介護概論等に加えられた（文部科学省1999）。その後、2007年の介護福祉士養成カリキュラムの改正によって、2009年度より介護福祉士養成カリキュラムに必須科目として新設されたものであり、科目介護過程は、介護福祉士の専門的な実践力を習得することをねらいとしている。

現在、介護過程の構成要素について、中谷洋子（2019）は、「テキストの教育内容や介護過程の定義、構成要素もまちまちで十分な議論は行われておらず、教育の統一には至っていない」と述べている。その要因の一つに、介護過程が何を源泉として構成されたものであるかという問題がある。その問題に対して矢部浩子ほか（2005）は、介護保険導入とカリキュラム改正に合わせて改訂された介護概論のテキストを用い、その内容について比較検討を行っている。その結果、介護過程の構成要素は、看護過程を基にしたもの、社会福祉援助技術の援助過程を応用したもの、介護保険制度におけるケアマネジメントを応用したもの³、の大きく3つの流れがあると述べている。こうした異なる源泉から構成された介護過程は、新設され歴史的にもまだ間もないこともあり、現在においても課題を多く含んでいる。

その一方で、介護過程の教育の中でも、重要なものであると概ね共通認識がなされているものの一つにアセスメントがある。柘崎京子（2010）は、「介護過程の一連のプロセスのうち、介護過程の教育で最も重要なのは、アセスメントである」とし、「アセスメントは、生活課題や支援の方向性という『判断』を導き出す過程である。判断に至るプロセスをどう思考するかは介護過程の重要課題である」と述べている。本研究では、この柘崎のアセスメントの課題提起を受け、アセスメントを介護過程における最重要項目とする。

アセスメントの範囲や内容は、介護過程の構成要素が統一されていないこともあり、テキストによって異なることが多い。そこで、本研究では、前述した矢部ほか（2005）や、介護過程における構成要素とアセスメントの位置づけに関する研究を行った池田明子・佐野好久（2012）、『介護過程』（実教出版株式会社2019年発行）を参考に、アセスメントの範囲を「情報収集—情報の分析（解釈）—関連付け・統合化—課題の明確化」としたうえで、アセスメントの内容を「サービス利用者の人権を尊重し、その人らしい生活を実現するためにどのような介護が必要なのか、あるいはどのような介護サービスが求められているのかを考え、科学的根拠にもとづいた情報収集と分析を行うこと」とする。そして、介護過程の構成要素を「アセスメント→介護計画の立案→介護計画の実施と評価」とする。

次にアセスメント能力について述べる。柘崎（2010）は、アセスメントに影響を与える要因の一つに、「介護観や実践観などの考え方」をあげており、観による影響を示唆している。また、中家（2019）は、

「アセスメントを行うには、分析、解釈、判断のための知識や価値観が求められる」と述べており、アセスメントを行うための専門的な知識の活用という技術的な側面とともに価値観という観が影響していることを示唆している。しかし、双方ともアセスメント能力の構成要素として技術と観の関係性については明確に述べられていない。その一方で、看護過程の領域では、鈴木清子・頭山悦子（1996）がアセスメント能力の構成要素について述べている。鈴木らは、看護過程におけるアセスメント能力を、看護観を前提としたコミュニケーション技術・日常生活援助技術、人生観・看護観などの哲学、関心・熱意・向上心・探求心・研究心・能力を土台とし、情報収集能力、問題分析能力、言語化能力、意思決定能力としている。つまり、鈴木らは、アセスメント能力の構成要素とは、観を土台とした技術であると示している。前述したように介護過程は、看護過程の流れを汲んで生まれた背景もあり、このアセスメント能力の構成要素は介護過程におけるアセスメント能力の構成要素としても概ね理解できる。よって本研究では、アセスメント能力を「介護観や人生観等の物事の見方・考え方を土台とした、情報収集能力、問題分析能力、言語化能力、意思決定能力」とする。

本項の最後に、介護過程におけるアセスメント能力の育成を目指した先行研究の到達点と課題について検討する。嶋田（2016）によると、「専門性の高い介護を行うために必要となるアセスメント能力を向上させるための研究と、具体的なアセスメントツールを開発しアセスメント能力の向上を測定するための研究に二分化されている」と述べている。しかし、学習者の実践力を観（価値観・信念・哲学）と技術（知識・技術）の相互作用により形成されるという観点からみると、これらの研究は介護過程におけるアセスメント能力の技術を身に付けることを主としたものである。

そこで本研究では、学習者の実践力を観と技術から構成されていると捉え、観の自覚化・相対化・変容を目的とする対話的事例シナリオを用いた授業が、介護における実践力の一つである介護過程におけるアセスメント能力の育成にどのような効果を与えるのかを検証する（図1）。

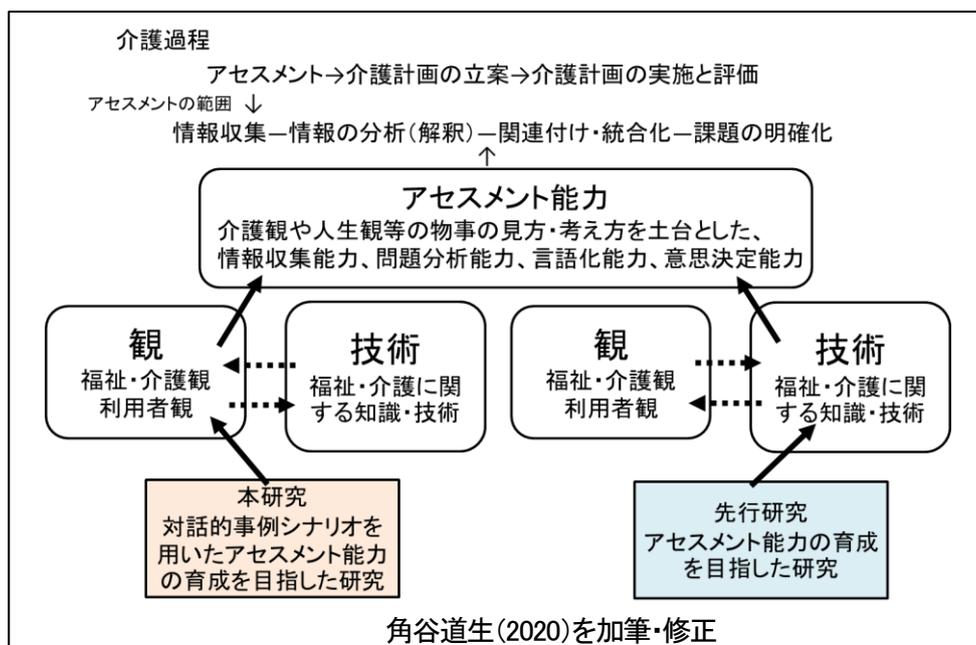


図1. 本研究の概要

本研究の目的と方法

本研究では、筆者が所属する高等学校令和2年度福祉科目選択者高校2年生18名（以下：生徒）に対して対話的事例シナリオを用いた授業を実施し、介護過程におけるアセスメント能力の育成にどのような影響を与えるのかを検証する。検証方法は、生徒の授業での様子やワークシートに記載された生徒のコメント、第9回目の授業後にクラス全員に行った授業アンケートをもとに考察する。なお、対話的事例シナリオを用いた授業構成は、角谷（2020）の方法を引用・修正し、9回実施した。基本的な授業形態としては、事例シナリオと対応例としての選択肢を提示し、生徒は選択肢を参考に、なぜその対応をするのか理由を個人で考え、意見を全体で共有する。その後、選択肢ごとのグループになり、各選択肢の対応を深く考えるための追加の質問を提示し、グループで意見を出し合い、全体で共有する。最後に介護職の実践例を提示し、生徒は今日の授業で気づいたことや考えたことを個人でまとめるというものである。その後、生徒の取り組み状況を見ながら、選択肢を提示せず、3つの観点（どのような可能性を考え、何を大切にし、どのような対応をするか）に沿って、対応を考える（4～7回）、3つの観点で対応を考えた上で、その考えを揺さぶる「追加の質問」を加えた（8～9回）の3つの授業形態で実施した（図2）。

本研究の主旨、データ利用については生徒・保護者に文書にて説明し同意を得た。また、本研究におけるデータ利用について所属長に説明し許可を得た。

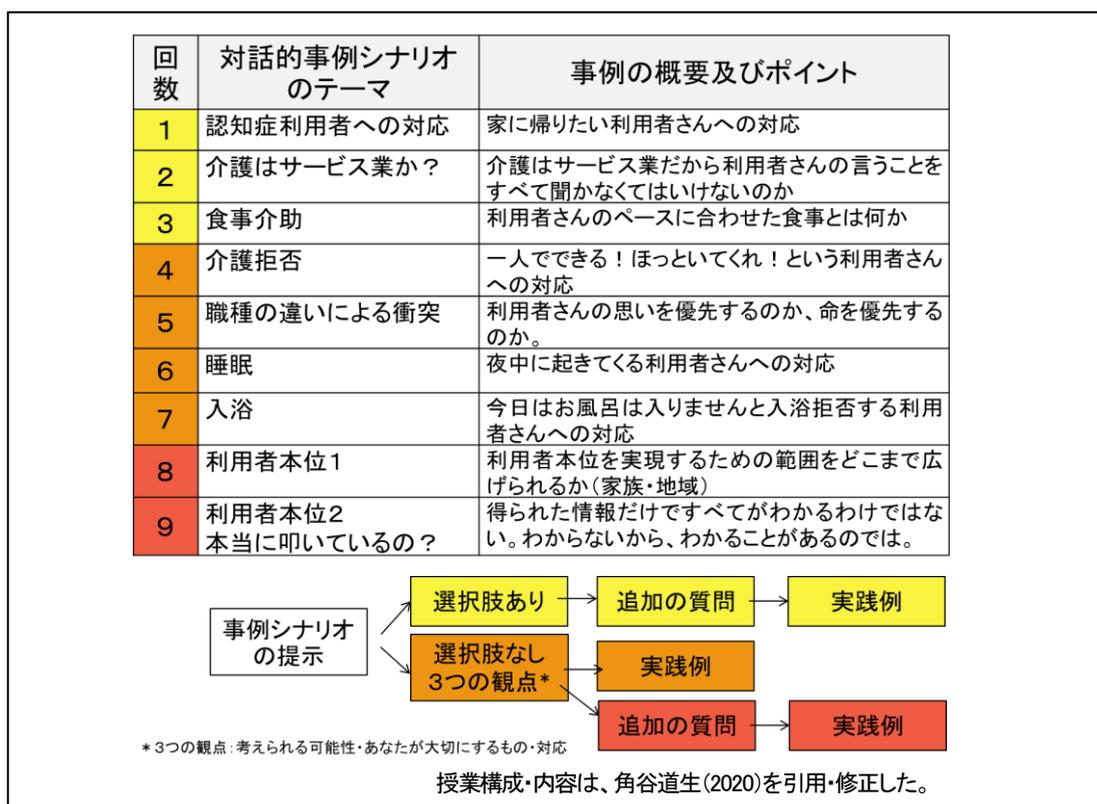


図2. 対話的事例シナリオのテーマと授業形態

結果

ここでは初回である第1回目と授業形態が変わった初回である第4回目、そして最終回の第9回目の3つの授業を中心に取り上げる。本研究の対話的事例シナリオを用いた授業では授業形態が変わることで、生徒の観の自覚化、観の相対化、観の変容に広がりや深まりが見られると想定している。また、詳細は後述する

今回の事例はかなりざっくりしていたので、皆の意見が全然違って、グループワークでの話し合いがとてもおもしろかったです。他の人の意見に書いた3つの意見は、本当に全く違う意見だし、僕の意見ともかすりもしない全く違う意見だと思います。ですが、どれもまちがっていないと思います。むしろ全部正解なのではないでしょうか？僕にはそう思えます。考えられる可能性を元にして、大切にすること、対応を書いていきましたが、考えられる可能性が少ないとその部分だけに細かくいってしまって(意識が集中してしまって)、とても視野が狭くなることがわかりました。だから、おもしろいくらいに人との意見がわかるんだと思いました。もし、施設に行ったときにこういう場面に遭遇したら、広い視野を持って考えられる可能性をさがし、対応していけたらと思いました。

第9回目「利用者本位2」では、同居している息子による虐待が疑われる内容である。生徒Aが授業の最後に書いたコメントは下記の通りである。

(前略)私はもしかすると、(施設利用者の)Gさんは息子さんを恐れてしまっているのではないかと考えたので、完全に息子さんがやった(暴力をふるった)と決めつけていました。(中略)結論を言うと、最初の事例だけで完全に息子さんがやってしまった(暴力をふるった)と決めつけるのが良くなかったと思います。原因や理由、動機などもわかっていない情報量が少ない文章で決めつけてしまいました。利用者さんと利用者さんの家族のアセスメントがもっと必要だと思いました。*()内は筆者加筆

第9回目の授業後、事例シナリオを用いた授業とアセスメントに対するアンケートを行った。事例シナリオを用いた授業については、事例を取り入れた授業を通して、あなたが特に身についたと思う力について、自由記述で回答を求めた。アセスメントについては、より良いアセスメントを実現するためにどのような力が必要かについて自由記述で回答を求めた。生徒Aの回答は次の通りである。

9回の授業終了後のアンケート結果より、事例を取り入れた授業を通して、特に身につけたと思う力 生徒Aの回答

まだまだ出来ていないけれど、一年生の時に比べて深く考える力がついたと思います。一年生の時は、何か問題やめ事などがあつたとき、少ない情報で決めつけ、軽はずみに意見を出していました。しかし、今は、その情報は正しいのか、それまでの経緯を考えたり聞いたりするようになりました。

9回の授業終了後のアンケート結果より、より良いアセスメントを実現するためにどのような力が必要か 生徒Aの回答

私が必要だと考える力は傾聴です。情報を利用者さん本人やご家族の方から聞くにしても話を聴く姿勢や態度をより良くしていないと大事なことを聞き逃したりすることもあるかもしれない。だからこそ一番基本的で大切な傾聴を大切だと考えました。

考察

ここではそれぞれの授業でのコメントを具体例として取り上げた生徒Aのコメントを中心に、対話的事例シナリオを用いた授業が生徒Aにどのような影響を与えたのかについて考察するとともに、生徒Aを含む授業クラス全体のアンケート結果をもとに、対話的事例シナリオを用いた授業がアセスメント能力の育成にどのような影響を与えたのかについて考察する。

第1回目の授業において、生徒Aは最終的には自分は利用者さんが家に帰るのを止めてしまう（観の自覚化）としているが、他者の意見を聞くこと（観の相対化）を通して、自分が絶対にはないと思っていた行動についても納得できるものがある（観の変容）という見方・考え方の広がりを示している。第4回目の授業では、他者の多様な意見のあり方から（観の相対化）、自身の視野の狭さ（観の自覚化）とそれがもたらす結果に気づき、視野を広く持ち、多面的に考えて行動したい（観の変容）と述べている。第9回目の授業では、自分が事例の情報だけで息子が暴力をふるっていると決めつけていた（観の自覚化）ことに気づき、利用者やその家族を含むアセスメントの必要性（観の変容）について述べている。第9回目の授業後のアンケートでは、アセスメントを行う上で重要なものとして、生徒Aは傾聴をあげている。傾聴とは利用者の話や思いを受け止める聴き方の一つであり、利用者とのコミュニケーションを行う際の重要な技術である。生徒Aのこれまでの経緯から、自分には少ない情報で決めつけてしまう傾向（観の自覚化）があったが、対話的事例シナリオを用いた授業の中で他者の意見を聞くこと（観の相対化）で、聴く姿勢や態度をより良くし傾聴を大切にしていきたい（観の変容）と考えるようになったと捉えることができる。

以上のように対話的事例シナリオを用いた授業は、観の自覚化・相対化・変容を促しはするが、一直線に成長・発展させていくものではないことがわかる。生徒Aは第4回目と第9回目で自身の視野の狭さという同様の課題を自覚化し、第4回目では、視野を広く持ち、多面的に考え行動するというやや抽象的なものだったが、第9回目では、利用者さんと利用者さんの家族のアセスメント（情報収集—情報の分析（解釈）—関連付け・統合化—課題の明確化）に至り、そして授業後のアンケートでは、アセスメントを行う土台となる傾聴を行うというように徐々に具体的かつ専門的なものに変化している。これは、同様の課題を様々な角度から問い直し、具体的かつ専門的な観の変容を通して、問題の所在を明らかにしようと試みていることを示している（図3）。

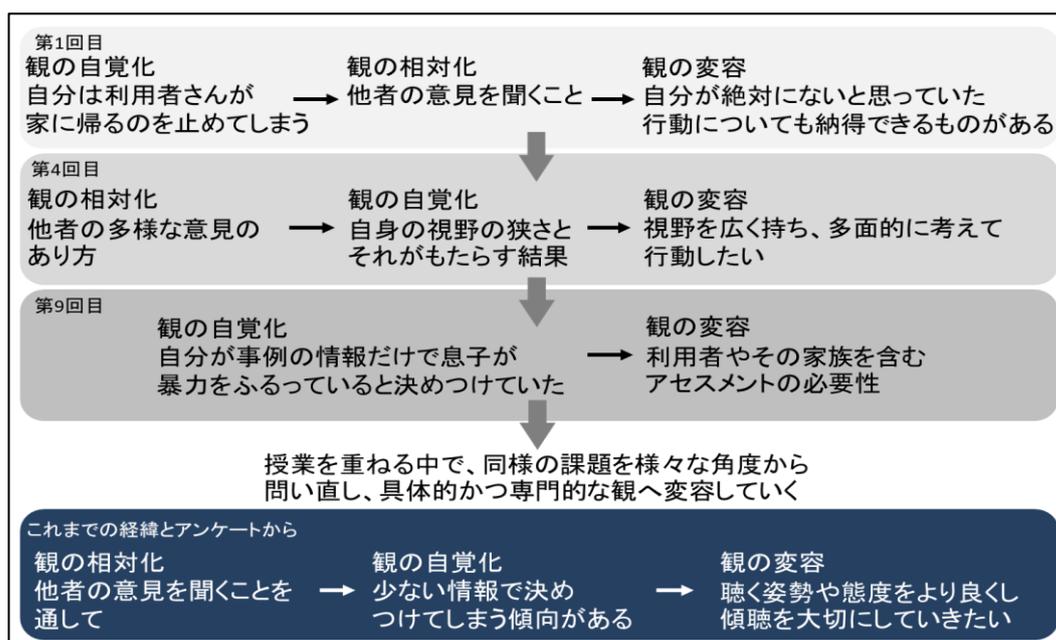


図3. 本研究における対話的事例シナリオの授業が生徒Aに与えた影響

このように対話的事例シナリオを用いた授業を通して、自分自身の課題に気づき、様々な角度から問い直すことで、具体的かつ専門的な観へと変容していくという、生徒Aの傾向は、紙幅の都合上割愛したが、クラス全体のそれぞれの授業時のコメントの概要とも一致しており、本研究における典型的な傾向といえる。

また対話的事例シナリオを用いた授業を通して身につけたものとして、授業クラス全体が回答しているものは、「利用者さんだけではなく、その家族や多職種や周りの環境のことも含めて考える力がついた」や「うわべだけでなく、後先のことや文には書かれていないことも考えて深く読み取る力がついた」などの物事の見方・考え方に関する記述（18名中17名94%）、「いろいろなことが考えられるようになり、書くことが増えたし、他の授業でも欄いっぱいまで書く癖がついた」、「自分で考えたことを書く、文章力が自分の中で一番身についたと思う」などの書く力に関する記述（18名中6名33%）、「人の意見を聞くことで、こんな意見もあるのかと、視野が広がり楽しく感じられるようになった」、「みんなの意見を聞いて、共感したり、驚いたりするのが面白いと思えるようになった」などの他の人の意見を聞く力（18名中4名22%）の3つに大別することができる。このうち、物事の見方・考え方に関する記述と他の人の意見を聞く力は、アセスメント能力における情報収集能力、問題分析能力、意思決定能力につながるものであり、書く力に関する記述は言語化能力につながるものである。

これらのことから、対話的事例シナリオを用いた授業は、生徒たちに観の自覚化・相対化・変容を促す中で、生徒たちは自分自身の課題に気づき、様々な角度から問い直すことで、具体的かつ専門的な観の変容へと導いていくと同時に、事例シナリオに対し自分の力で考え、自分の意見を他者に伝え、他者の意見を聞くことを通して、情報収集能力、問題分析能力、意思決定能力、言語化能力を育てていることがわかった。これは対話的事例シナリオを用いた授業が、本研究におけるアセスメント能力の土台である介護観等の物事の見方・考え方と、情報収集能力や問題分析能力等の技術の両面の育成に寄与するものであることを示している（図4）。

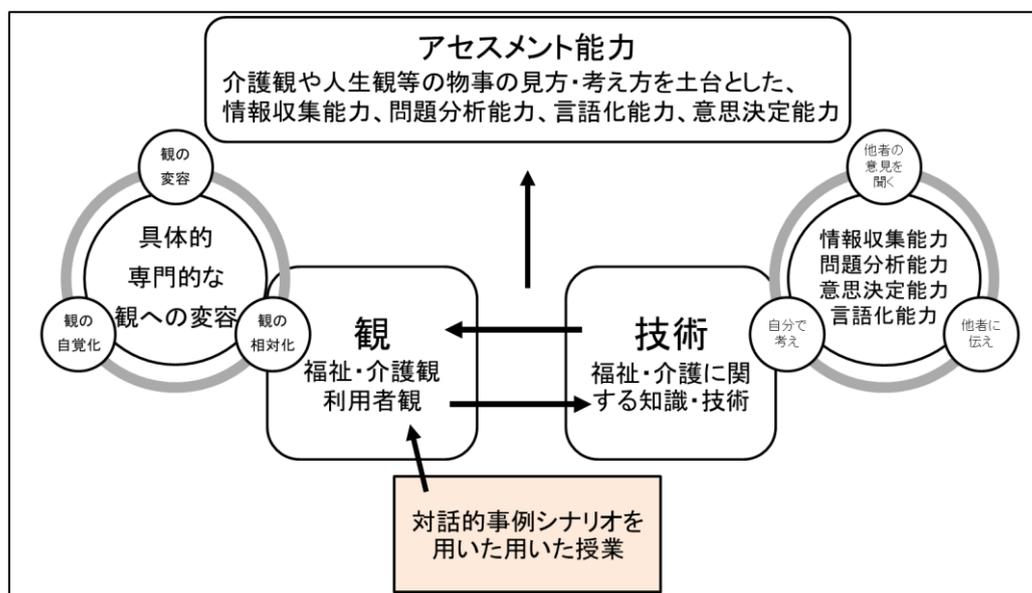


図4. 本研究で得られた対話的事例シナリオを用いた授業の効果とアセスメント能力への影響

成果と課題

本研究では、学習者の実践力を観と技術から構成されていると捉え、観の自覚化・相対化・変容を目的とする対話的事例シナリオを用いた授業が、介護の実践力の一つである介護過程におけるアセスメント能力の育成にどのような影響を与えるのかを検証した。

結果として、対話的事例シナリオを用いた授業は、生徒たちに観の自覚化・相対化・変容を促す中で、生徒たちは自分自身の課題に気づき、様々な角度から問い直すことで、具体的かつ専門的な観の変容へと導いていくと同時に、事例シナリオに対し自分の力で考え、自分の意見を他者に伝え、他者の意見を聞くことを通して、情報収集能力、問題分析能力、意思決定能力、言語化能力を育てていることがわかった。これにより、対話的事例シナリオを用いた授業が、本研究におけるアセスメント能力の土台である介護観等の物事の見方・考え方と、情報収集能力や問題分析能力等の技術の両面の育成に寄与するものであることが明らかになった。

今後の課題として2つあげる。1つ目は、観の変容における新たな評価方法の検討である。本研究ではクラス全体としてはアンケート調査を用いて、また個別事例としては生徒Aの観の変容をモデル化した。この両者によって、ほぼ対話的事例シナリオの有効性については検証できたと考えるが、生徒が自らの観の変容を技術とのつながりの中で自覚化すること、そして、なぜそのような変容に至ったのかという変容の意味の自覚化というものは捉えることができなかった。観の変容やその意味の自覚化には新たな評価方法が必要である。

現在考えられるものとして、コンセプトマップを用いる方法がある。コンセプトマップとは、「物事と物事、考え方と考え方、あるいは人と人との間に成り立つ関係について人間がどのように理解しているかを探る手法（野村学ほか2003）」であり、生徒は与えられたお題から連想するものを自由に書き込み一つの図にするものである。このコンセプトマップを、対話的事例シナリオを用いた授業を行う科目の受講前（4月）と受講後（3月）に「私が介護を行う上で必要なこと・もの」などの同じお題で生徒が作成し、それらを比較・検討するという方法や、受講後（3月）に「対話的事例シナリオを用いた授業で身に付いたもの」というお題で作成したものを検討するという方法がある。これにより、生徒の観の変容をより明らかに捉えられる可能性があるため、今後検討・実施していく。

2つ目の課題として、対話的事例シナリオの効果を個別事例だけでなく、クラス全体で評価する方法の検討がある。これについても、コンセプトマップを利用して、全体の傾向を示すことで客観的なデータとして提示できる可能性があるため、今後検討・実施していく。

参考文献

- 中央教育審議会（2016）「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」。
- 枝崎京子（2010）「介護過程のアセスメントシートの作成 —アセスメント段階における理解を高めるための2つのアセスメントシート—」共栄学園短期大学研究紀要第26号 pp.1-27.
- 池田明子・佐野好久（2012）「介護過程における構成要素とアセスメントの位置づけに関する研究」新見公立大学紀要第33巻 pp.109-113.
- 角谷道生（2020）「高校教科福祉における対話的事例シナリオを用いた授業の効果と検証」人間教育と福祉 第9号 pp.99-107.
- 野村学・三浦克宜・斉藤一・齋藤健司・前田隆（2003）「コンセプトマップを利用した学習評価支援システムとその利用について」情報処理学会研究報告コンピュータと教育 68 pp.63-68.
- 文部科学省（1999）「福祉専門職の教育課程等に関する検討会報告書」。
https://www.mhlw.go.jp/www1/houdou/1103/h0310-1_16.html 閲覧日:令和2年10月24日
- 森脇健夫（2011）「授業研究方法論の系譜と今後の展望」田中耕治・森脇健夫・徳岡慶一『授業づくりと学びの構造』学文社。
- 中家洋子（2019）「介護過程におけるアセスメントに焦点化した思考過程の可視化に向けた効果的な教育方法」大阪人間科学大学紀要第18号 pp.83-93.
- 日本介護福祉士会 HP <http://www.jaccw.or.jp/fukushishi/senmon.php> 閲覧日:令和2年10月24日。

- 嶋田直美 (2016) 「介護過程教育の課題」 桃山学院大学社会学論集第 49 号第 2 号 pp.177-193.
 鈴木清子・頭山悦子 「アセスメント能力とは何か」 看護技術 Vol.42 NO.7 pp.11-15.
 山田康彦・森脇健夫・根津知佳子・赤木和重・中西康雅・大日方真史・守山紗弥加・前原祐樹・大西宏明 (2018)
 『PBL 事例シナリオ教育で教師を育てる—教育的事象の深い理解をめざした対話的教育方法—』 三恵社.
 矢部浩子・小林朋美・寺嶋洋恵 (2005) 「介護概論における介護過程の概念に関する諸説の検討」 聖隷クリストフ
 ー大学 社会福祉学部紀要第 3 巻 pp.35-47.

注

- 1 中央教育審議会答申では、職業に関する各教科・科目の課題を二つあげている。
 ・科学技術の進展、グローバル化、産業構造の変化等に伴い、必要とされる専門的な知識・技術も変化するとともに高度化しているため、これらへの対応が課題となっている。
 ・専門的な知識・技術の定着を図るとともに、多様な課題に対応できる課題解決能力を育成することが重要であり、地域や産業界との連携の下、産業現場等における長期間の実習等の実践的な学習活動をより一層充実させていくことが求められている。
 中央教育審議会 (2016) p.211.
- 2 対話的事例シナリオとは、大学にて教員養成 PBL の一つとして、観の自覚化・相対化・変容を目的とした、山田康彦ほか (2018) が考案したものである。対話的事例シナリオの授業は、1. 事例シナリオの提示 2. 定説の提示 3. 定説に対する批判 4. 定説にかわる実践例の提示の 4 つの段階で構成されている。学習者はこれら 4 つの段階の中で、事例シナリオ・教師・学習者同士・自己内対話を行い、自らの観の自覚化・相対化・変容を行っていく。角谷 (2020) では、介護経験や生活経験の少ない高校生が取り組みやすいように、2. 定説の提示を選択肢の提示に変更し、3. 各選択肢に対する批判を、選択肢を選んだ生徒の意見をゆさぶるような「追加の質問」を作成・提示し、生徒が自分自身の考えを広く、深くとらえ直し、知の探究にいざなう役割を強く出すようにした。なお、授業の実際の現場でよくある対応や介護職員の実践例は、筆者の所属校の近隣にある介護施設職員に協力を依頼し、助言いただき、実施した。
- 3 看護過程を基にした介護過程の構成要素：情報収集・アセスメント・介護計画・実施・評価
 社会福祉援助技術の援助過程を応用した介護過程の構成要素：援助の開始期（インテーク・アセスメント・プランニング）・援助の展開期（具体的援助の実施、モニタリング）・援助の終結期（問題解決過程の評価）
 介護保険制度におけるケアマネジメントを応用した介護過程の構成要素：インテーク・アセスメント・介護計画原案・ケアカンファレンス（サービス担当者会議）・利用者または家族の同意・介護計画の実施・モニタリング
 矢部浩子・小林朋美・寺嶋洋恵 (2005) 「介護概論における介護過程の概念に関する諸説の検討」 pp.38-39.

要約

本研究では、学習者の実践力を観と技術から構成されていると捉え、観の自覚化・相対化・変容を目的とする対話的事例シナリオを用いた授業が、介護の実践力の一つである介護過程におけるアセスメント能力の育成にどのような影響を与えるのかを検証した。

結果として、対話的事例シナリオを用いた授業は、生徒たちに観の自覚化・相対化・変容を促す中で、生徒たちは自身の課題に気づき、様々な角度から問い直すことで、具体的かつ専門的な観の変容へと導いていた。また同時に、事例シナリオに対し自分の力で考え、自分の意見を他者に伝え、他者の意見を聞くことを通し、情報収集能力、問題分析能力、意思決定能力、言語化能力を育てていた。これにより、対話的事例シナリオを用いた授業が、本研究におけるアセスメント能力の土台である介護観等の物事の見方・考え方と、情報収集能力等の技術の両面の育成に寄与するものであることが明らかになった。

キーワード

アセスメント能力、介護過程、対話的事例シナリオ